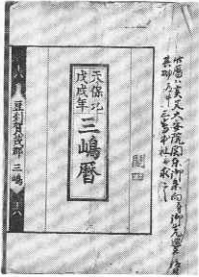


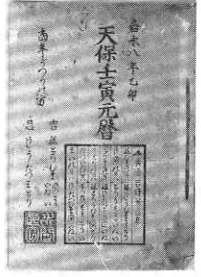
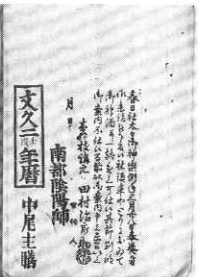
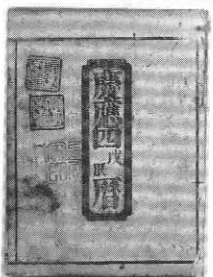





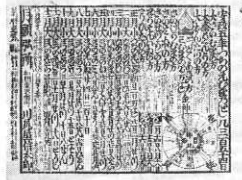


郷土館だより

Vol. 10, No.2

1988. 2. 1

 <p>三島暦</p>	 <p>伊勢暦</p>	 <p>会津暦</p>	 <p>薩摩暦</p>
 <p>南都(奈良)暦</p>	 <p>仙台暦</p>	 <p>地震なまずのいせごよみ (江戸暦)</p>	 <p>江戸暦</p>
 <p>盛岡暦</p>	 <p>秋田暦</p>	 <p>弘前・稽古館暦</p>	 <p>金沢・月頭暦</p>

三島暦と日本の地方暦展

— 1月3日～3月6日 —

年明け早々の正月3日から「三島暦と日本の地方暦展」を開催しています。寒い季節にもかかわらず、多くの方々が、暦展のために訪れてくれています。

本展では、先祖代々三島暦師を存続してきた河合家の古文書や三島暦をはじめ、全国の地方暦、大小暦、明治の改暦時代の啓蒙書、太陽暦採用以後の広告等、約150点の各種の暦を展示しました。

特に三島暦・京暦・会津暦・伊勢暦等に代

表される日本の地方暦が、今回のように一堂に集められることはあまりありませんので、ぜひこの機会にご覧いただきたいものです。

三島暦の展示は、三島暦が郷土を代表する文化財ということだけでなく、全国的にも優れていて、歴史の古い暦であることをさまざまな角度から取り上げて、解説してみました。この点においても、暦の町三島ならではの展示企画であろうと思います。

歴史ある三島暦

三島暦は、旧暦時代を代表する地方民間暦です。第一に歴史の古さは、都で作られていた京暦（大経師暦とも称されている）に比肩されます。また印刷の出来ばえの良さは、京暦に優るとも劣らず、細字で美しい文字模様は「みしま」と称され、摺物の代名詞だったと伝えられます。これほど高い知的レベルの文化が、三島という一地方に、しかも独自に存在したということは驚嘆に値します。

三島暦師

暦を作り、それを一般に頒^はつてきたのは、暦師といわれる特別な権限を持つ者でした。三島暦師は代々河合某が暦師を継承してきました。河合家の古文書や言い伝えによると宝亀年間（770～）に三島明神を勧請して山城国より移り住み、貞観年間に暦を作り始めたとされています。

現在三島市大宮町にある河合家（河合正子さん宅）は、かつての暦師家で五十数代の家系を有する旧家です。住宅は江戸時代後期の建築で、玄関は式台のついた武家風の造り、奥座敷は一段高くなった上段の間、脇の入口の左側の部屋は暦の印刷作業場となっている等、独特で、格式の高い建物です。屋敷地南側に面した小路には、暦門（こみかど）という地名が付いて、ここが古くからの暦師住宅だったことを物語っています。



河合家玄関

宣明暦法時代

河合家の伝承、現存する最古の暦等から、三島暦は、当初宣明暦法を用いて独自の暦を作っていたことが判ります。宣明暦法は貞観年間に唐よりもたらされ、同四年（862）以後840年間にわたって日本で採用された暦法



享保11年三島暦（解説次ページ）

でした。当時の日本には暦法を編むに足る天体観測の結果も無く、他国の暦法を借用する以外には方法は無かったのです。と言っても、このような暦法を読み、理解し、それに基いて暦を作るということだけでもとび抜けた専門的知識を必要としたものです。都で、こうした任に当り次第にそれを専門化させて行ったのは、唐への留学生吉備真備を祖とする賀茂家の子孫たちでした。後の天文道を支えた土御門、幸徳井等の家は賀茂家に端を發したものです。

足利文庫所蔵の重要文化財『周易古写本』の表紙裏として残った最古の三島暦（永享九年1437）は内容から宣明暦法に基づいて作られたものと判定されます。これより古く、文献中には三島暦の名が出てきます。義堂周信の『空華日工集』には応安7年（1374）3月4日の条で「熱海に浴す。けだし三島暦は、この日を以て上巳節となす…」と記されています。三島暦が存在した証明だけでなく河合家が独自で暦を作っていたことを証明しています。つまり京では上巳節は3月3日であるのに、三島は3月4日なんだなあと、著者は書いています。

京と三島の日付のくい違いは、それぞれが独自に計算をして暦を作っていたからでした。

江戸時代(貞享暦時代、1685以降)

江戸時代になると、幕府が天文方という役所を設け、暦の作成権はここに移されました。ただし、従来の伝統的な暦屋は存続を許され幕府作成の原稿を使って暦の発行を続けることができました。しかしこの少し前から伊勢

享保十一年三島暦の暦注略解説

十六日 つちのとのとり	あやぶ	土	十
十五日 つちのえさる	やぶる	水	神よし
十四日 ひのとのつじ	きたん	火	さいげしきかどいよよし
十三日 ひのえむま	たいら	金	神よし入字わたましよし
十二日 きのと	みつ	土	大みやう入字わたましよし
十一日 きのえたつ	のぞく	金	大みやう日げんふくよし
十日 ひみつのそら	なつ	土	わうまたたねまましよし
九日 ひみつのうし	とつ	金	大みやう日げんふくよし
八日 かのとのうし	ひらく	土	きしく神よし 小く日か天火
七日 かのえね	おさん	金	五む日 きのこ日ちい
六日 つちのえいぬ	なる	土	わうまたたねまましよし
五日 つちのえいぬ	なる	金	わうまたたねまましよし
四日 ひのとのとり	あやぶ	土	むまの三朝二十十
三日 ひのえさる	あやぶ	火	わうまたたねまましよし
二日 きのとのつじ	やぶる	金	むまの三朝二十十
一日 きのえむま	とる	土	むまの三朝二十十

- 1 行目…「豆州賀茂郡 三島」は暦の出版地である。これが、後の天保壬寅暦になると「御曆師河合龍節藤原伸満」に変わる。
- 2 行目…「享保十一年丙午の貞享暦」は暦の通用する年号と干支と推算に使われた暦法である。貞享暦は、渋川春海の手になるわが国独自の暦法である。「心宿値年」は、この年が28宿の心宿にあたる(値)という意味である。「三百五十四日」は、1年の総日数
- 3 行目上段…「歳徳 あきの方己午の間万よし」とあり、その年の歳神さんの所在方向で、あきの方 あるいは恵方と称し、すべてに良い方向となる。
- 3 行目下段、4 行目上・下段、5 行目上・下段

- 6 行目上・下段、7 行目上段…八將軍の所在方向と主要な吉事と凶事である。「大歳午の方 此の方に向て万よし但、木をきらず」「大將軍卯の方 未の年まで三年ふさがり」「大陰辰の方 此の方にむかひて産をせず」「歳刑午の方 むかひて種時かず」「歳破子の方 むかひて移徒せず、舟乗り始めず」「歳剋丑の方 此の方より嫁とらず」「黄幡戌の方 むかひて弓はじめよし」「豹尾辰の方 向て大小便せず畜類求めず」
- 7 行目下段…「金神」の所在方向で、この年は、子、丑、寅、卯、午、未となる。
- 8 行目…「土公神」の所在、春は龍、夏は門、秋は井、冬は庭とある。
- 9 行目10行目…その年の各月の大小である。旧暦の場合、毎年のように大(三十日)小(二十九日)の配列が異なっていたので、この一覧表だけは欠かせないものだった。大小だけが分る「大小暦」なども在った。
- 11行目…暦の月日に関する最初の部分で、「正月大」は正月が大の月であることを示す。「建庚寅」は、³³¹建庚寅と読み、この正月は十干の庚にあたり、寅は北斗の尾が指している方向を示している。建をおざすと読むのは、「尾指す」に由来する。「室宿値月は、この月(正月)が二十八宿の室宿に値(あたる)ことを示し、「胃宿土曜値朔日」は、この月の一日が、二十八宿で胃宿に、七曜は土曜にあたることを示している。二十八宿は天上での星の位置をいいあらわすために、中国で考えられたものである。高松塚古墳内の玄室の四壁に描かれた青竜、白虎(西)、朱雀(南)、玄武(北)の四神は、天井に描かれた二十八宿の諸星との関係で生まれた神々である。
- 12行目…ここからは上段に毎日の日付と干支、十二直(注1)が入った。中段(注2)は、貞享暦の場合、選日・雑注と称される干支の組合せで決まる日の吉凶や五節句・雑節・年中行事等が入った。下段(注3)には、暦注二十箇条の吉凶やその日に何をすることが吉かなどの記入があった。
- 注1 十二直…建たつ 除のぞく 満みつ 平たいら 定さだん 執とる 破やぶる 危あやぶ 成なる 納おさん 開ひらく
- 注2 中段(貞享暦の場合暦注十三箇条と称される)…天一天上 八尊 間日 社日 彼岸 十方暮 土用 八十八夜 入梅 半夏生 三伏 二百十日 節分
- 注3 下段(貞享暦の場合 暦注二十箇条)…受死日 十死日 五幕日 掃忌日 血忌日 重日 復日 天火日 地火日 大禍日 狼籍日 減門日 時下食 歳下食 凶会日 天赦日 神吉日 大明日 鬼宿日 往亡日

神宮が伊勢暦を出すようになり、伊勢御師の活躍もあって、伊勢暦が全国津々浦々に広まったのでした。これにより、三島暦は思うように売れなくなるなど、大きな影響を受けています。河合家では、伊勢の奉行にあてて、「伊勢暦が伊豆に入らないように」と、しばしば訴え出た記録が残っています。

明治時代

明治に入ると、新政府は諸外国との交流上の不都合もあって、新暦すなわち太陽暦の採用にふみきったのでした。「明治5年12月3日を以って明治6年1月1日とする」という急な改暦は、世間を驚嘆させたものだと伝えら

れています。世間以上に驚き、かつ当惑したのは永い伝統を持ち、特権的な地位に安住してきた暦屋でした。三島暦師も例外ではありませんでした。当時の古文書には、暦屋の存続と暦の販売権の確保を願い出て、東奔西走した様子が、しっかりと残っています。

結局、全国の暦屋は、領暦商社という暦販売会社を設立し明治15年まで暦屋を続けることができました。三島の河合家も社員として加わり、この時代、販売先五カ国(伊豆、駿河、甲斐、相模、安房)と増加させています。三島暦の最後のものは、現在「明治18年の太陽略暦」が確認されています。三島暦師家はこの時、1200年の暦屋の幕を閉じたものです。

連隊の町——三島(1)

三島駅の北には、県道三島一裾野線のいちよう並木をはさんで、日本大学三島学園をはじめ、幼稚園から大学までの教育施設と、税務署、検察庁などの行政施設が並んでいます。

この文教地域は、昭和20年の終戦まで、陸軍野戦重砲第二・第三連隊の所在地でした。

鉄道の開通により、さびれた宿場町を再生させようと、三島町をはじめ周辺町村の誘致により、大正8年、連隊が設営されました。

当時の三島の情勢と、戦後の文教地区への変容を、述べてみましょう。

(1) 兵営誘致の動き

明治38年(1905)9月、日露戦争の講和条約がポーツマスで調印されました。戦勝気分の中、陸軍では、軍備を拡張し、新たに数個師団増設を計画します。

この頃の三島は、三島町と3村に分かれていましたが、明治22年の東海道線開通とともに、東海道を徒歩で旅する人は激減し、五大宿場町といわれるほど栄えた三島は、さびれる一方でした。

又、当時の東海道線は御殿場経由で、昭和9年の丹那トンネル開通まで、伊豆地方は、とり残されてしまいました。

こうした状況の中で、兵営を誘致することに北伊豆地域の活路を見出そうとしたのです。

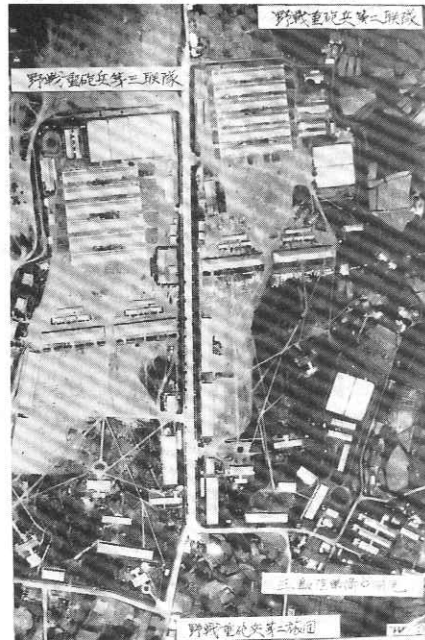
明治38年10月には、三島町民総代17名の連書による陸軍兵営増設請願書が、当時の陸軍大臣寺内正毅、参謀総長山縣有朋宛に出されました。この中で

「人口一万一千以上ニシテ物価ハ魚族穀類蔬菜干草等豊富ニシテ軍隊日用ノ要度ハ管内比較的低廉ナル」と三島の生活の良さをPRしています。これには、三島町統計略表が付され、米・麦を始め、農産物・干草等の一カ年平均産出高がくわしく記載されています。最後に三島町長河合龍節より地方官に、兵営増設の際は、格別の詮議を以て三島に指定されるよう具申しています。

野戦重砲第二・第三連隊の誘致

兵営誘致運動は、この後盛り上がり、この年11月9日には、本町有志が、本町附近を想定して師団連隊増設誘致運動をすること、又5名を選び、運動いっさいを委嘱することを評決し、委員に大沼吉平、島田保作、河邊富助、小出貫一、川口周作各氏を選出します。

同月、河合町長も東京の代議士3名に兵営



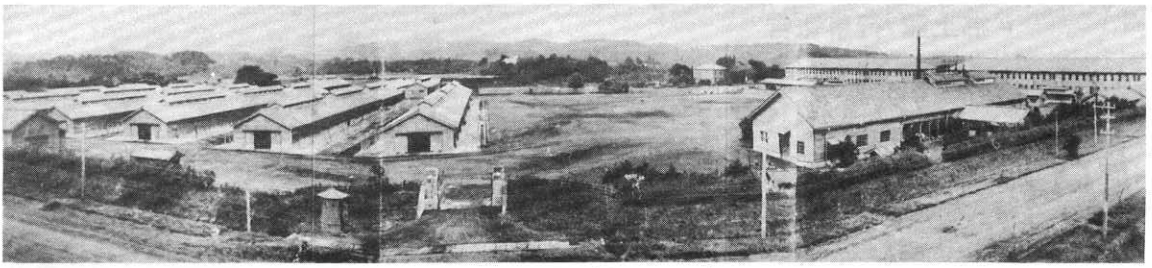
◀(中央の道路が、現在の銚坂いちよう並木)
野戦重砲兵第二・第三連隊、航空写真

誘致に関して、委員の派遣等の依頼を行っています。40年にも、再び陸軍参謀総長奥保鞏宛に三島町請願惣代5人(河邊富助、小出貫一、島田保作、大沼吉平、河合龍節)が、師団増設地の請願書を提出しています。

こうした町を挙げての熱心な誘致運動も、この時期には、実らずに終わりました。しかし、この運動が導火線となり、10数年後に、三島が兵営設置の最有力候補となるのです。

(2) 三島野戦重砲二連隊・三連隊の誕生

大正3年(1914)第一次世界大戦が勃発し、日本も参戦します。この時、陸軍の首脳は砲撃戦の重要性を再認識し、大正6年、野重砲を要塞砲の重砲連隊から独立させ、旅団(12連隊)をつくり、野戦訓練に専念させる計画を立てました。



▲ 第二連隊全景（裏門より）

大きな野重十五榴砲^{りゅうぱう}の実弾演習ができる地域ということで、富士の裾野が演習場に決まります。兵営の候補地としては、三島・沼津・御殿場の3ヵ所が上がりましたが、気候・居住環境・物価など考慮の上、三島に決定しました。

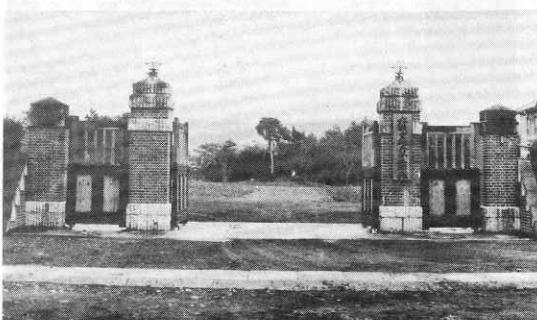
こうして、10年以上にわたる、三島町民の兵営誘致の悲願が実ります。

兵営の設置された芝町錠坂の土地は、富士山の溶岩台地の南端にあたり、水利の悪さから人家はなく、桑畑と荒地でした。

今の北高の正門近くに、金掘り塚と一本の松があり、ここからは富士及び駿河湾・田方地方を一望できたといわれています。この眺望^{たうぼう}を愛した、三島の近世教育の父と呼ばれる並川誠所（1668～1738）は、遺言して、死後この塚に埋葬されました。しかし、連隊の移駐にともない、塚は撤去され、墓は加屋町の林光寺に移されました。

連隊の用地取得については、間宮清左衛門町長が依頼を受け、町議会も満場一致で誘致を決定し、用地買収にあたることとなります。

しかし、軍事最優先の時代とはいえ、土地買収は金額が折り合わず難行しました。買収期限が迫り、他に誘地される事を恐れた間宮町長は、議会にはかり町有地を売却して差額



▲ 第二連隊の営門（現在の北中正門）

を埋め合わせ、買収を完了したといわれます。

こうして、三島野戦重砲二連隊が大正8年11月10日、三連隊は翌9年11月下旬に、誕生しました。

二連隊の前身は横須賀の要塞重砲二連隊で、第一次世界大戦では青島攻撃で活躍しています。また、三連隊の前身は和歌山の深山重砲で、日露戦争の時、203高地・旅順戦で活躍しました。

移駐の日、町では目抜き通りや営門付近にアーチを設け、チョウチン行列に山車まで出て、全町あげてのおまつり騒ぎで歓迎したといわれています。

(3) 三島と連隊

当時の三島周辺は、農業を除くと、産業は少なく「金鶏ミルク」等の乳業の他、田方郡下で盛んであった製糸業も冷細なもので、信州等の大規模工場のため衰退していきました。

連隊の移駐は町に大きな活気を呼び起こしました。軍人が闊歩し、軍馬がいなき、砲車^{かべ}が通る軍都に一変しました。

物資と人がどつとあふれ始めました。「軍人納入組合」が出来、干草・食料等を納入する商人たちは軍と強い結び付きを持ちました。現在、日大・北高内に残る桜の古木は、この「組合」が寄贈したものといわれます。殺風景な営内も、春には、花で埋まりました。

移駐後、住みやすい三島に永住する将校も多く、また、三島の娘さんと結婚する兵隊も相当数に上りました。

将校の宴会は「ときわ」「竹直」などで催され、遊郭は軍人たちでにぎわいました。

終戦までの約30年間、三島はこのように軍都として栄えることとなります。（続く）

郷土館 行事報告

ふるさと講座

今年度より郷土館を、多くの人に利用してもらい、郷土意識を高めていただく
——と、婦人を対象とした講座を開設しました。講座は年間を通して5回、講演と
体験講座。郷土三島の歴史、民俗にふれるとともに楽しく学んでいただきました。

第1回

「三島の歴史」

歴史のまちである三島について、長谷川福太郎氏を講師に招き（7月9日）話をさせていただきました。

三島の歴史に、鎌倉の話などを折込みながら、興味深く分かりやすく話をされたので、婦人の皆さんは熱心に聞き入っていました。



第2回「複製三四呂人形づくり

三島の生んだ人形作家・野口三四郎の作品のうち「里子」をモデルにしました。講師の四条悦子さんの指導で、それぞれほのぼのとした人形を作り上げました。

▲ 9月10日 郷土館会議室で。

三四呂人形づくりにがんばる講座生

第3回

草木染め 10月8日

古代より受け継がれている染め、それも山に自生している植物を採り、それを染料として布を染める技術を知ろうと草木染め研究家井上一雄氏を講師に学びました。

材料は自生している萩の花を使い、染めの基本を勉強しました。受講生の婦人たちは、持ち寄った白い木綿や絹切れを生石灰で作った媒染液、萩で作った液に繰返し漬け黄色とねずみ色に染め上げました。婦人たちはこの布を使って、のれん、はんかち、ふろしきに使うとはりきっていました。



第4回

「武田信玄と三島」講演

武田信玄が駿河へ侵攻した折の三島とのかかりについて、長谷川福太郎氏を講師にお話を伺いました。信玄公は戦国最強軍団の指導者であり、また一面巧智と人情にたけた民政家でもあった。今回はそのような信玄公の実像にせまる興味深い話をしていただきました＝11月12日。

第5回

「七草がゆ作りと年中行事」

体験講座

正月行事について郷土館杉村学芸員の話を聞いたあと、大場にお住まいの主婦、中村一枝さんに講師になっていただき七草がゆ作りに入りました。

昔は正月六日の夜分に年神さんの下で主婦が組板の上に七草を載せ、めぐり棒と包丁で「七草なずな唐土の鳥が日本の国へ渡らぬ先に合せてバツバタ」と唱えながらたたいたものだそうです(写真、12月10日撮影)これを供えておき、翌七日、七草がゆにして食べる。昔の風習をまじえながらの話と実演。おかゆを食べながら、和気あいあいと楽しいふんいきの中で終ることができました。



おかざり作り講習会

年の瀬も迫った12月13日、郷土館恒例の行事、「おかざり作り講習会」が開催されました。

講師に芹沢貫一さん(川原ヶ谷)を迎え、わらをなう事から始め、小輪飾り、大神宮飾り、玄関飾り等を作りました。

初め、わらをなうのも、なかなか出来なかった受講生(23名)も、講師の適切な指導で、苦勞しながら製作しました。最後に、うら白、ゆずり葉、枝付みかん(橙の代わり)等を飾りつけ、正月を迎える準備が整いました。



▲芹沢さん(一列目中央)と、出来上がったお飾りをもつ受講生

『東海道浮世絵展』

『東海道五十三次の旅』

9月から12月にかけて、二度続けて東海道浮世絵を主題とした企画展を開催いたしました。

最初は9月5日から10月25日までの「三島を中心とした東海道浮世絵展～箱根白須賀23宿～」で、続いて佐野喜版の狂歌入り浮世絵で連ねた「東海道五十三次の旅」でした。

特に後者は、最初の企画展を見た市民が、自ら愛蔵のコレクションを持って来て下さったために出来た展示でした。会期は11月16日から12月24日まででした。この展示も、新聞やテレビに取り上げられるなどの話題を呼び、前回と同じように多くの人々に喜んでもらえました。

日本橋から京三条(京の内裏を含む)までの56枚の浮世絵で、昔の東海道の旅を楽しんでいただけたものと思います。

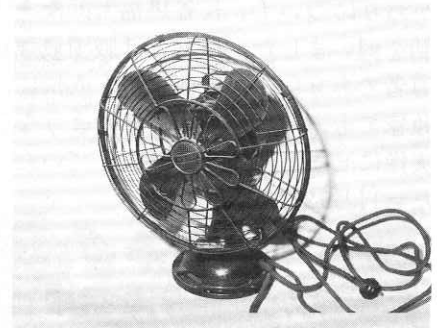
会期中の入館者数

区分	9月5日～30日 (24日間)	10月1日～25日 (25日間)	計 49日間
学生(小中高)	1,687	2,850	4,537
一般(個人)	3,348	4,270	7,618
団体(30人以上)	(9) 360	(11) 690	(20) 1,050
合計	5,395	7,810	13,205

■収集資料紹介

昭和62. 8～

資料名	点数	受入日	提供者	
掛軸	4	62.8.30	南田町7-1	蓮池 稔一氏
書	2	"	"	"
油鏡	1	"	"	"
銅灰皿	1	"	"	"
漆器	5	"	"	"
帯 (三四呂タリヤの絵)	1	62.9.22	大仁町大仁481	遠藤 種子氏
着物地(三四呂ユリの絵)	1	"	"	"
火ばち (丸型)	1	62.10.15	大宮町2丁目3-22	青木 裕氏
火ばち(四角形)	1	"	"	"
祖国絵本歴史帖	1冊	63.1.6	東本町2丁目8-35	諏訪部 実氏
新聞切抜帖	3冊	"	"	"
下駄職人道具	1式	63.1.27	西本町1-19	山田祐松 氏



▲旧式4枚羽根扇風機

～下駄職人道具一式～

山田祐松さん(西本町1-19)から寄贈された下駄職人道具一式は、民俗資料としての価値の高いものです。

この道具には、16歳で新潟へ年季奉公に出て腕を磨き、その後三島で所帯を持ち下駄職人になった山田さんの汗と油と愛情がしみ込んでいるようです。この道具は山田さんが先輩からゆずり受け、それを手入れをしながら今日まで使い慣らしてきたものだそうです。

現在、道具一点一点の名称、使用法、寸法等の調査を進めています。常設展示場でご紹介できる日も間近だと思います。

編集後記

郷土館が、1月16日午前10時30分から静岡県庁で開かれた昭和62年度静岡県文化施設表彰式で、地域文化の振興と郷土意識の高揚に尽した施設として表彰されました。

これも、ひとえに諸先輩、講師の先生がたおよび皆様がたの暖かいお力添えのたまものと、お礼申し上げます。

愛される郷土館として職員一同、がんばっていきたいと思います。今後ともよろしく願いいたします。

■刊行物のご案内

「三島暦と日本の地方暦展」図録

三島暦に関する資料を始め、江戸時代に頒布された特色ある地方暦(伊勢暦、南部暦、砂川暦等)の解説や、明治6年の太陽暦への改暦等、暦に関する話が掲載されています。

* 頒価 600円(送料1冊200円)

お求めは 郷土館(71-8228)まで



利用案内

休館日 毎月第1月曜日・12月27日～1月2日

開館時間 午前9時～午後4時30分

入場無料(但し、楽寿園入場の際、有料)

郷土館だより No.29

昭和63年2月1日発行

(年3回発行)

編集 三島市郷土館
住所 〒411 三島市一番町19-3
(楽寿園内)
TEL 0559-71-8228
発行 三島市教育委員会